

VIII 研修全体のふりかえり・評価

※2015年度開発教育指導者研修（実践編）（教師海外研修含む）受講者に対し、全ての研修終了後に実施したアンケート結果を取りまとめた。なお、集計表から無回答を除いているため各項目の合計は100%にならない場合があります。

■ 研修への期待と満足度について

受講者の開発教育指導者研修（実践編）（以下、「指導者研修」という）や教師海外研修（以下、「海外研修」という）に対する期待や目的は、「開発教育・国際理解教育の内容・手法・事例を知る」（90%）、「自らの視野や能力を研鑽する」（76%）、「参加型学習・ファシリテーターの能力を高める」（68%）及び「世界の現状や日本とのつながりを知る」（68%）が上位3つとなっている【設問1】。

それらの期待や目標を持った受講者は、研修に対して「とても満足できた」（88%）、「満足できた」（10%）と回答しており、十分に満足度の高い研修であったといえる。

設問1；指導者研修・海外研修に期待したこと・目標としたことは何ですか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発教育・国際理解教育の内容・手法・事例を知る	37	90%
2	自らの視野や能力を研鑽する	31	76%
3	参加型学習・ファシリテーターの能力を高める	28	68%
4	世界の現状や日本とのつながりを知る	28	68%
5	実践者同士で交流し、ネットワークを作る	24	59%
6	その他	1	2%
	全体	41	100%

設問2；指導者研修、海外研修は、あなたの期待（あるいは目標達成の支援）を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	36	88%
2	満足できた	4	10%
3	ある程度満足できた	1	2%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体	41	100%

■ 研修を受けた自分自身の意識の変化について

● 受講者の関心の高まり

受講者の88%が「受講後により関心が高まった」と回答しており、本研修が受講者の人権、環境、貧困、開発、共生、平和などに関する情報への関心の高まりに寄与しているといえる【設問3】。

設問3；研修を通じて、人権、環境、貧困、開発、共生、平和などに関する情報に関心を持つようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講前から関心があったが、受講後より関心が高まった	36	88%
2	受講前はあまり関心なかったが、受講後関心が高まった	2	5%
3	受講前から関心があり、受講後も変わらない	3	7%
4	受講前はあまり関心なかったし、受講後も変わらない	0	0%
	全体	41	100%

研修を通して、受講者自身が「地球上で起きている環境や貧困問題と自分とのつながりについての理解」したり、「国際協力について自分にできることの意識化」をしたりできたかについてみると、前者は「よくわかっ

た」と「わかった」を合わせて88%、後者は「よく考えるようになった」と「考えるようになった」を合わせて93%となっており、本研修は受講者自身の学びや行動に繋がったといえる。

設問4；研修を通じて、地球上で起きている環境や貧困の問題と自分たちの生活とのつながりがわかりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よくわかった	22	54%
2	わかった	15	37%
3	ある程度はわかった	4	10%
4	あまりわからなかった+わからなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問5；国際協力（身近な買い物から直接支援まで）について自分にできることを考えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よく考えるようになった	22	54%
2	考えるようになった	14	34%
3	ある程度は考えるようになった	5	12%
4	あまり考えるようにならなかった+考えるようにならなかった	0	0%
	全体	41	100%

その他、地球市民として、具体的に受講者が気づき、考えるようになった主な内容を以下に示す。

設問6；その他、地球市民として、何に気づき、何について考えるようになりましたか。（主な回答内容）

<世界で起きていることを知ること・学ぶことの大切さ、楽しさ>

- ◇世界の出来事や日本との違いを肯定的に受け止め、自分事に捉えることの大切さと楽しさ。
- ◇見えているものだけで判断せず、そのものの背景や選択の影響を考えることの大切さ。
- ◇エルサルバドルでも日本でも、戦いを二度と起こしたくないという思いを同じくする若者がいること。

<世界への関心の高まり>

- ◇世界を知ることによって日本を見つめ直すきっかけとなり、日本についてもっと知りたいと思うようになった。
- ◇身近な話題からグローバルな問題までつながり、その過程を考えていくことが必要だと思いました。
- ◇地球上の問題に、無関心でいてはいけな。知り、考え、行動することが大切。無関心が一番の罪である。
- ◇貧困や環境などの国際的な問題について、多面的・多角的に現状を知る努力をしなければならない。

<日本（自分）と世界とのつながり>

- ◇世界のあらゆることが自分とつながっている。他者の立場を常に想像しながら生活をしていきたい。
- ◇私たちの生活のあり方が、途上国の貧困や児童労働、環境問題に関わっている。
- ◇世界のどこかでおきていることは、自分の問題として当たり前のこと。
- ◇人が作った国境という政治的壁、それを超えてつながる経済。
- ◇フェアトレード商品や学校で生徒に話をするなど、自分が気づけなかっただけでつながりが身近にある。
- ◇自分の周りの物や情報と世界が繋がっている。買い物をするとき、物の背景を想像するようになった。

<人とのつながり・広がり>

- ◇他のメンバーの情報に興味を持ち、アンテナを高くしていく。
- ◇人と人同士のつながりで、人は小さな幸せを見付けることができる。
- ◇違いのある考えや他者と協働して、課題を解決する仲間を増やしたい。
- ◇知ったことや気付いたこと、国際協力の輪を広げるには、どうしたらよいのかを考えるようになった。

<価値観の多様性/多様性を認め合うことの大切さ>

- ◇世界は広く様々な文化があるが、幸せを願う気持ちは共通。多文化共生は可能。
- ◇自分が心を開き、相手をまず認めることで良い関係を築くことができる。
- ◇世界の人たちに優しくすることと身近な人に優しくすることは同じだと考えるようになった。

<教育（教育者）の使命と可能性>

- ◇私たち一人ひとりが暮らしを見直すことで世の中が変わるのだという学習ができること知った。
- ◇現状を教えるだけでなく、現状を知り、気づき、何ができるか考えるまでの「プロセス」がとても大事。
- ◇子どもが世界の課題を身近に捉えて実践するために、何に気づいてもらうとよいのかを考えるようになった。
- ◇自分の生活と地球上の問題が深く関わっていることを生徒たちも気づくようにしたい。
- ◇環境問題は重大な課題であり、学校教育現場でさらに実践する必要性を感じた。
- ◇授業での子どもとの関わり方を見直すきっかけになった。

<持続可能な未来を考えた行動>

- ◇シンクグローバル、アクトローカル！未来を共有化して行動すること。
- ◇消費者として購入するものを選択することで変わることがある。1人の100歩より、100人の1歩が大切。
- ◇地球市民みんなが幸せに暮らせる方法を考えたいと思うようになった。
- ◇今後自分に何ができるかというよりも、今自分に何ができるかということを考えるようになった。
- ◇少しずつでも自分が変わらないと、社会は変わらない。自分にできることを考え、始めることができた。
- ◇自分たちの身近な地域社会について知り、行動していくことが地球市民として大切である。
- ◇障害（児、者）について、ますます考え、障害者も同じように生きていける世の中になるように貢献したい。
- ◇欲求の満たし方がプラスの内容・方法だと、好循環が生まれる。

● 開発教育・国際理解教育の内容理解

受講者が考える開発教育・国際理解教育の範ちゅうは、受講後にその幅が広がり、特に選択肢（No.9～12）が大きく増えて割合が90～95%となっている。研修により開発教育・国際理解教育の幅が広がり、「自分たちの生活とのつながりの中で地球規模の課題を考え、解決する意識を育む教育であること、そのためにはスキルトレーニングが必要であること」といった開発教育・国際理解教育への理解が深まったといえる【設問7,8】。

設問7,8；受講前後に考えていた「開発教育」または「国際理解教育」の教育の範ちゅうはどれですか。（複数回答）

No.	選択肢	受講前		受講後		割合増減
		回答者数	割合	回答者数	割合	
1	外国語教育	10	24%	14	34%	10%
2	異文化理解	38	93%	37	90%	-3%
3	国際交流	29	71%	32	78%	7%
4	日本の伝統・文化	10	24%	26	63%	39%
5	開発途上国の開発	25	61%	33	80%	19%
6	南北問題	10	24%	21	51%	27%
7	国際協力	32	78%	37	90%	12%
8	在住外国人との共生	11	27%	25	61%	34%
9	人権・環境・平和など地球規模で考えるべき課題	20	49%	37	90%	41%
10	地球規模の課題と自分とのつながり	18	44%	38	93%	49%
11	様々な課題の解決に向かおうとする意識の育成	10	24%	37	90%	66%
12	自己肯定感・コミュニケーション・参加協力に関わるスキルトレーニング	10	24%	39	95%	71%
13	その他	1	2%	4	10%	8%
	全体	41	100%	41	100%	-

■ 開発教育・国際理解教育の実践について

● 実践時間

受講者の開発教育・国際理解教育の実践時間は、「5～9 時間以上」が 15 人（37%）と最も多く、次いで、「1～4 時間」11 人（27%）、「10～14 時間」6 人（15%）となっているほか、「20 時間以上」という受講者も 5 人（12%）おり、短時間から長時間まで多様な実践が行われていることがわかる【設問 9】。

前年度との対比では、28 人（68%）の受講者が「前年度より増加した」とした一方、「前年度より減少した」とした受講者が 7 人（17%）いる【設問 10】。

増加した理由としては、「教師としての教育観・使命感の変化」「活用できる教材や引き出しの増加」「研修を通じた機会の創出や時間の捻出」となっており、本研修の受講が、開発教育・国際理解教育の実践時間を前年度より増加させた大きな契機になっているといえる【設問 11-1】。一方、実践時間が減少したのは、実践環境の変化が主な理由となっている。【設問 11-2】

設問 9；開発教育・国際理解教育の延べ実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	11	27%
2	5～9時間	15	37%
3	10～14時間	6	15%
4	15～19時間	4	10%
5	20時間以上	5	12%
	合計実践時間数	444	時間
	1人当たり平均実践時間	10.8	時間/人

設問 10；前年度に比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	前年度より増加した	28	68%
2	前年度と変わらない	6	15%
3	前年度より減少した	7	17%
	全体	41	100%

設問 11-1；実践時間が増加した理由は何ですか。（主な内容）

< 教員としての教育観・使命感の変化、目標の明確化 >

- ◇ 教師海外研修及び、開発教育指導者研修で学んだことを子どもに還元したい！と強く思ったため。
- ◇ 教師海外研修に参加し、子どもたちと考えたいテーマや、やってみたいアクティビティに出会えたから。
- ◇ 「やりたい！」と思える国際理解教育の実践が具体的に自分の中で思い浮かんでいったため。
- ◇ 海外研修に参加し、伝えたいこと、伝えるべきことができたため。

< 活用できる教材や引き出しの増加 >

- ◇ 開発教育の理解や手法を具体的に知ることで、より実践で生かすことができるようになったから。
- ◇ 国際理解教育の知識が増えたことに加え、参加型の手法を知ることができたから。
- ◇ 海外研修に参加させていただき、たくさんの生きた授業で持ち帰り材を使うことができた。
- ◇ これまでの受講者の方の実践や、JICA の資料等を活用することができたから。
- ◇ 総合学習の時間だけでなく、社会科の授業での実践がより自由にできるようになった。

< 研修を契機とした機会の創出・時間の捻出 >

- ◇ 今回の研修を受けたことで、職場の人に実践時間を設けることを相談できた。
- ◇ 今回の参加の機会を通して、既存の教科カリキュラムの中に組み込んでみた。
- ◇ 昨年度も受講したため、見通しを立てて、系統的にプログラムを立てることができたため。

<現場の理解、変化>

- ◇4月当初から、職場に実践計画を伝え、年間計画に盛り込んでもらったため。
- ◇他の学年と教員を対象にも実践を行ったため。開発教育を学年で行おうという話になったから。
- ◇総合的な学習の時間を国際理解教育に当てることを推奨してくれる方がいた。
- ◇学校や学年が協力的で、じっくり実践をすることができたから。
- ◇進学校ではない高校へ転勤し、いろんなことを試してもいい風土があったため。

設問 11-2；実践時間が減少した理由は何ですか。(主な内容)

- ◇昨年度、総合的な学習の時間で年間を通して国際理解教育を行ったが、今年度は、持ち上がりの子どもたちで小学6年生の忙しさも加わり、時間の確保が難しかった。
- ◇昨年度は教師海外研修に参加しいろいろと実践する場が多くあったが、今年はその部分が少し減ったため。
- ◇総合的な学習の時間の年間スケジュールがきっちり決まっており、授業を組み入れることが難しかった。転勤したてでその他の教科でも思ったより余裕が無かった。
- ◇社会人になり、自由度が下がった。土日にボランティアをする機会が減った。

● 実践内容

前年度に比べて実践内容は深まったかどうかについては、「とても深まった」48%、「深まった」25%、「ある程度深まった」25%との回答が得られ、98%の受講者が、実践内容が深まったとしている【設問 12】。

その理由は、「研修の質と量」「開発教育・国際理解教育への理解の深まり」「参加型の理論と方法理解とスキルの習得」「学びの継続、経験の蓄積、意欲の高まり」「十分な実践時間確保と授業計画の立案」「多様な仲間との対話と刺激」「リソース・教材の入手と活用」などとなっている【設問 13】。一方、あまり深まらなかったのは、「自分の現場で学習者主体の授業をする難しさ」「自分の経験と自信のなさ」「自らの教材研究の不足」が理由となっている。

**設問 12；前年度に比べて本年度の実践内容はどのよう
になったと思いますか。**

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	19	48%
2	深まった	10	25%
3	ある程度深まった	10	25%
4	あまり深まらなかった	1	2%
5	深まらなかった	0	0%
	全体(無回答1名除く)	40	100%

設問 13；実践内容が深まった理由は何ですか。(主な内容)**<開発教育・国際理解教育及び参加型学習の理論と方法理解、スキルの習得>**

- ◇実体験を通して、参加型の手法を学ぶことが出来たため。自身の関心もさらに高まったため。
- ◇参加型授業の展開の仕方と手法を学び、使える手法が増え、取り組みの幅が広がった。
- ◇流れのあるプログラムを作成するコツと重要性を学び、学習者の思考が活性化するような工夫ができたため。
- ◇ファシリテーションの手本を見られたことで、自分自身に去年より少しかけ学習者を待つ余裕ができたため。
- ◇アクティビティ優先ではなく児童に気づかせたい考えさせたいことが、自分ではっきりと持つことができた。
- ◇研修を繰り返し受けることで、自身にファシリテーションの意識ができたこと。

◇二年連続で受講したことで、参加型学習の意義やファシリテーターの役割について体感することが増え、より理解が深まった。

<子どもたちの変化の実感、効力感>

◇参加型授業の方法を知り、児童同士が互いに学び合うことが出来た。児童同士の関係もよりよくなった。

◇様々な環境問題について、児童が自分の身近なことから取り組めることに考えられるようになった。

◇児童のいきいきとした姿と実践以外でも休み時間等で児童が取り組む姿があったから。

◇子ども達（低学年）の世界の国、名前についての関心が高まり、質問をしてくる子が増えた。

<十分な時間の確保と授業計画>

◇年間計画を立て、行事や総合学習のテーマにそって学習を進めたから。

◇年間を通して、十分な実践時間を確保できたため。◇内容が深まるよう十分な計画を立て実践をしたから。

<リソース・教材の入手と活用>

◇教師海外研修で得た資料をもとに、各学年の発達段階に応じたプログラムを行ったため。

◇教師海外研修での写真やインタビューなど、生の資料を使い細部まで伝えることができたようになった。

◇自分が直接、行って、見て、体験したことを授業の教材に使い、しっかりとビジョンを持って、授業を組み立てようと意識して取り組むことができたため。

◇エルサルバドルを取り上げた、自分にしかできない教材ができた。

◇昨年のフォーラムで印象に残った実践を参考に、教材を活用した。過去の実践記録を参考にできたこと。

<多様な仲間との対話・刺激>

◇仲間からのアドバイスで自分の知識が増え、ファシリテーターとしてのスキルが向上したため。

◇他の受講者との交流で、意欲が増したから。

◇普段は1人で考えている問題を他の受講者と一緒に考えることで考えが深まり、学習意欲も高くなった。

● 参加型のスキル

開発教育指導者研修（実践編）は、行動変容を支え関係性を育む「参加型」と参加型で学び合う場を提供するファシリテーターの役割を理解し、自ら習熟することをねらいに定めて実施した。これらのねらいに対し、受講者がどの程度理解し習熟したかを3つの指標で評価した結果は以下のとおりである。

1つ目の指標「気づきから行動へつながるプログラムの作成」については、「とても作れるようになった」10%「作れるようになった」34%、「ある程度作れるようになった」51%であり、大半の受講者がプログラムの作成スキルが向上したと認識している【設問14】。

2つ目の指標「学習者主体の手法の活用」については、「とても使えるようになった」17%「使えるようになった」37%、「ある程度作れるようになった」41%であり、プログラムの作成スキルよりも多くの受講者が学習者主体の手法の活用力が向上したといえる【設問14】。

3つ目の指標「理解・実践した参加型の手法」については、「ブレインストーミング」80%、「アイスブレイキング」78%、「派生図・因果関係図」76%、「カード式整理法（KJ法）」54%といった主要な参加型手法については半数以上の受講者が実践している。一方、「ランキング」24%、「指標づくり」34%の活用は低くなっており、手法により実践度に高低差が見られた【設問15】。

その他、受講者が「場づくり、学習者の主体性、学習者同士の学び合いを進めるファシリテーターとして、あなたが心がけたり、実践したりしたこと」に関する主な回答は、次ページのとおりである。

設問 14；研修や実践を通じて、流れに沿って気づきから行動へとつながるプログラムを作れるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても作れるようになった	4	10%
2	作れるようになった	14	34%
3	ある程度作れるようになった	21	51%
4	あまり作れるようにはならなかった	2	5%
5	作れるようにならなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問 15；研修や実践を通じて、学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや参加型の手法を使えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても使えるようになった	7	17%
2	使えるようになった	15	37%
3	ある程度使えるようになった	17	41%
4	あまり使えるようにはならなかった	2	5%
5	使えるようにならなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問 16；次の参加型の手法のうち、進め方を理解し、実践した手法はどれですか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合	No.	選択肢	回答者数	割合
1	ブレンストーミング	33	80%	6	フォトランゲージ	18	44%
2	アイスブレイキング	32	78%	7	ロールプレイ(なりきり紹介)	16	39%
3	派生図・因果関係図	31	76%	8	指標づくり(○箇条づくり)	14	34%
4	カード式整理法(KJ法)	22	54%	9	ランキング	10	24%
5	対比表	19	46%	10	その他	3	7%
					全体	41	100%

設問 17；場づくり、学習者の主体性、学習者同士の学び合いを進めるファシリテーターとして、あなたが心がけたり、実践したりしたことを教えてください。（主な内容）

<事前の環境整備・準備に関する心がけ>

- ◇準備と段取りにもっとも力を入れた。 ◇ユニバーサルデザインに心掛けた板書や道具。
- ◇準備とふりかえりに時間と労力をかける。 ◇日々、自己肯定感が高まるように声をかけること。
- ◇ファシリテーター自身が活動を楽しむ気持ちを持つ。

<プログラムづくりに関する心がけ>

- ◇意見の集約や時間配分を工夫した。 ◇まとめと振り返りを行った。
- ◇授業をどのように効率良く進行させるかではなく、どう学習者のアイデアを引き出すかに重きを置いた。
- ◇学習者が主体的に参加できるように、体験型の学習を多く取り入れた。

<参加型手法の選択に関する心がけ>

- ◇ねらいを達成できる思考の流れを意識した手法選び。
- ◇受動的ではなく、積極的に参加できるような手法を用いる。
- ◇学習者が主体的に学べるよう、どの手法を用いたらよいかを考えた。
- ◇派生図などの参加型手法を取り入れ、自分になかった考えや新たな見方を知ることができた子どもがいた。
- ◇多様な参加型手法を導入し、主体的に学ぼうとする姿勢や態度の育成を意識した。

<学びに向けた雰囲気づくりに関する心がけ>

- ◇始めに活動しやすいようにゲームなどをしてアイスブレイキングを行った。
- ◇参加者同士が知り合い、安心感を持たせるアイスブレイキング。 ◇リラックスした雰囲気作り。
- ◇生徒たちの関係性が良くなるように、授業以外でも場づくりができるような場面を持つように心がけた。
- ◇威圧的にならない。安心して考えを言えるように、自分もまたみんなと一緒に考えているんだという姿勢。
- ◇安心して自分の意見が言える雰囲気作り。 ◇間違ってもオッケーの雰囲気を作る。
- ◇自由に考え、気軽に発言ができる雰囲気作り。その時々効果的な声かけ。
- ◇自分のできることや得意なことが開発協力につながることを理解してもらえようなプログラム作り。
- ◇子どもが楽しめるプログラムを作ること。 ◇次へのつなぎ=やりっぱなしにしない。

<学習者の意見への対応に関する心がけ>

- ◇学習者の意見を肯定的に受け止めるように努めた。◇どの意見も肯定的に受け入れること。
- ◇参加型の手法を用いて、児童からの気づきを拾い、その気づきを認めること。
- ◇すぐに答えをいわない。どうしてだろう?と問いかける。すぐ全体発表にせず、step by step で話を進める。
- ◇自分の反応で子どもたちの考えが左右されないように気を付けた。
- ◇どんな考えにも肯定的に返答を、全体の雰囲気を柔らかいものにしようと心掛けた。
- ◇すべての意見を肯定して、全員が参加できるような雰囲気に心がけた。
- ◇笑顔で、話しやすい雰囲気をつくった。「なるほど」など肯定的な言葉掛けをした。
- ◇常に笑顔で。予定通りにいなくても、焦らない。
- ◇少しだけオーバーリアクション。生徒たちから出てきた意見は何でも拾う。
- ◇答えに困ったときに、適度な介入。でもできるだけ介入しないこと。

<発問、情報提供に関する心がけ>

- ◇アクティビティと問いかけの組み合わせをよく考えた。
- ◇質問を分かりやすい言葉で言うこと。繰り返すこと。視覚支援をすること。
- ◇あまり話すぎない。参加者が話すようにする。
- ◇児童にお互いの意見を肯定的に受け止めてもらうためファシリテーター自身も肯定的な言葉を選んで進めた。

<学習者への信頼に関する心がけ>

- ◇いつも笑顔で学習者のことを信じる。どんな意見や考えが出てきても肯定的に受け入れる。
- ◇筋道を立てて説明した後は、生徒を信頼して事の成り行きを見守ったこと。
- ◇こちらから教え込むようなアプローチをしないようにした。 ◇ヒントや答えを押しつけない。
- ◇子どもたちが個々に考え、発表する機会を設ける。
- ◇学生の意見を待つ。楽しそうにやる。ワーク中はなるべく口出ししない。

<子ども同士の関係、役割、グループ活動に関する心がけ>

- ◇子ども同士の円滑な人間関係を築くこと。 ◇グループ活動を意図的に増やした。
- ◇1人1人の役割を明確にすること。 ◇メンバーが平等にグループ内で役割を果たす。
- ◇全員が発表するポスターセッションを実践した。 ◇グループ作成時の配慮の必要な生徒に対する配慮。
- ◇学習者が違いを認め合うような学級経営を心がけた。 ◇全員が参加し、活躍する場をつくる。
- ◇いろんなグループで活動する。 ◇子どもたちが話し合ったり、伝えあったりする機会をつくる。

■ 学習者の変化や周りへの波及効果について

● 学習者の変化

開発教育・国際理解教育の実践により学習者のより良い変化があったかについては、「とても変化があった」「変化があった」と合わせて受講者の68%が学習者のより良い変化を強く実感している【設問18】。

より良い変化の中身については、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」61%、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」56%、「自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった」51%が上位3位となっている。また、「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」46%、「学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った」39%、「自らの生き方や共生について考えるようになった」37%、「話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった」34%といった変化の実感があった受講者も1/3以上となっている。これらのことから、受講者の実践により、「様々な課題の解決に向かおうとする意識の育成」や「自己肯定感・コミュニケーション・参加協力に関わるスキルトレーニング」に関し、学習者のより良い変化が現れているといえる【設問19】。

● 開発教育・国際理解教育以外の活動への波及

受講者の88%が開発教育・国際理解教育における参加型の手法や考え方何らかの活動に取り入れている。具体的には、「学級の決め事に取り入れた」41%、「コミュニティづくり(学級・地域)に取り入れた」37%、「一般の授業に取り入れた」27%などとなっている【設問20】。

設問 18；開発教育・国際理解教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	9	22%
2	変化があった	18	44%
3	ある程度は変化があった	14	34%
4	あまり変化はなかった+変化はなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問 19；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。
(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	25	61%
2	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	23	56%
3	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	21	51%
4	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	19	46%
5	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にしようとする意識が高まった	19	46%
6	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	16	39%
7	自らの生き方や共生について考えるようになった	15	37%
8	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	14	34%
9	その他	1	2%
	全体	42	100%

設問 20；参加型の手法や考え方を、自分の活動に関係することに取り入れましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	学級の決め事に取り入れた	17	41%
2	コミュニティづくり(学級・地域)に取り入れた	15	37%
3	一般の授業に取り入れた	11	27%
4	ミーティング・会議に取り入れた	7	17%
5	研修に取り入れた	6	15%
6	どこにも取り入れていない	5	12%
	全体	41	100%

● 学校や団体内の他の職員への波及

所属する学校や団体内の他の教職員に対して、研修で学んだ開発教育・国際理解教育や参加型の手法などを伝えた受講者は90%に達し、本研修は受講者により他の教職員への波及も得られていることがわかる。

その具体的な方法は、「日常のやりとりの中で伝えた」が68%と一番多く、次いで「研究発表（公開授業など）で伝えた」37%、「校内・団体内での報告会・研修会で伝えた」24%、「共同で教材を作成する際に伝えた」15%等となっている【設問21】。

伝えた人数は、全体で773人、1人当たり21人であり、波及効果は大きいといえる。

周りへの波及の環境として、実践活動への所属する学校や団体の上司や同僚の理解については、「とても理解している」、「理解している」、「ある程度は理解している」を合わせて88%と、多くの受講者は周りの理解のもと実践活動ができている。その一方で、12%の受講者は理解が得られていない環境で実践を余儀なくされているという実態もある【設問22】。

設問 21；所属している学校や団体内において、研修で学んだ開発教育・国際理解教育や参加型の手法などを他の教職員等に伝えましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	日常のやりとりの中で伝えた	28	68%
2	研究発表（授業公開など）で伝えた	15	37%
3	校内・団体内での報告会・研修会で伝えた	10	24%
4	共同で教材を作成する際に伝えた	6	15%
5	その他	4	10%
6	どこにも伝えていない	4	10%
	全体	41	100%

設問 22；所属する学校や団体の上司や同僚は、あなたが行う開発教育・国際理解教育や参加型の実践活動を理解してくれていますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても理解している	9	22%
2	理解している	13	32%
3	ある程度は理解している	14	34%
4	あまり理解していない	5	12%
5	理解していない	0	0%
	全体	41	100%

● 直接提供事業と比較した本研修による学習者への還元効果

開発教育支援の一つとして行っている「JICAが直接学習者に対して教授する国際協力出前講座、JICA施設訪問プログラム等（直接提供事業）」に対し、本研修は、養成された開発教育を進める中核的な指導者が研修で得た知識や能力を生かして、自らの現場で多くの学習者に対して継続的に還元することが期待されている。

研修受講者の実践実績から、直接提供事業の場合と比較した本研修による還元効果を計算すると、下記のとおり単年度当たり6.4倍となった。さらに、継続年数を加味すると、還元効果は10倍にも20倍にもなると考えられる。このほか、研修受講者は、研修で得た知識や能力、自らの実践などを他の指導者に伝達しており、そのことによる一定の還元効果も見込むことができる。

これらのことから、直接提供事業と比較して、本研修による学習者への還元効果は単年度実績として6.4倍、複数年、他の教職員への波及効果を加味すると、より多くの還元効果があるといえる。

◇研修受講者による延べ還元量＝22,333人・時間／年

◇研修で受講者に対して行った還元量＝開発教育指導者研修（実践編）受講者数43人×研修時間数33時間＋教師海外研修受講者数19人×研修時間数110時間（国内22時間＋海外平均8時間×11日）
＝3,509人・時間／年

◇還元効果（倍）＝22,333人・時間／年÷3,509人・時間／年＝約6.4倍

● 開発教育・国際理解教育ネットワークづくりへの波及

1年間の研修や実践を通じた開発教育・国際理解教育ネットワークは、すべての受講者ができたとしている。具体的内容は、「受講者同士」93%、「実践報告フォーラム参加者」29%、「実践を通じたネットワーク」12%となっている。【設問 23】。

設問 23；1年間の研修を通じて、開発教育・国際理解教育のネットワークができましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講者同士でできた	38	93%
2	フォーラム参加者とできた	12	29%
3	実践を通してネットワークができた	5	12%
4	その他	1	2%
5	できなかった	0	0%
	全体	41	100%

● JICA中部の開発教育・国際理解教育に関する支援メニューの活用度

受講者のJICA中部の開発教育・国際理解教育に関する支援メニューの活用度は90%と高い。

活用度が高いメニューは、「JICAホームページ等の情報」63%、「開発教育・国際理解教育に使える教材の提供・閲覧」56%、「なごや地球ひろばで開催するJICA主催講座・イベント」32%、「なごや地球ひろば訪問プログラム」27%などとなっている。

設問 24；JICA中部の開発教育・国際理解教育に関するメニューのうち、これまで活用したり、参加したりしたものはどれですか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	JICAホームページ等情報の活用	26	63%
2	開発教育・国際理解教育に使える教材の提供・閲覧	23	56%
3	なごや地球ひろばで開催するJICA主催講座・イベント	13	32%
4	なごや地球ひろば訪問プログラム	11	27%
5	国際協力出前講座	7	17%
6	各県で行う開発教育指導者研修(初級編)	7	17%
7	中学生・高校生エッセイコンテスト	4	10%
8	グローバル教育コンクール	3	7%
9	JICA中部メールマガジン「なごや地球ひろば便り」	3	7%
10	活用・参加していない	4	10%
	全体	41	100%

■ 全体を通して

● 最も大きな学びや変化

「受講者の1年間の研修を通した最も大きな学びや変化」についての回答は、以下のとおりである。

設問 25 ; 1年間の研修を通して、あなたの最も大きな学びや変化は何でしたか？ (主な意見)

<教育観・教育内容の変化>

- ◇国際理解教育に取り組む学校や研修に参加する人が大勢いて、新しい教育の形ができていくと感じた。
- ◇自分に今すぐできることは世界の現状について知り、自分とのつながりを考える機会をつくること。
- ◇自分を信じる+学生(対象)を信じる+参加型の力を信じる→気づき+行動+笑顔が生まれる。
- ◇この教育が身近なものになり、世界の諸問題を生徒にじっくり考えさせたいと思うようになった。
- ◇参加型学習の手法を知り、1つのテーマに対し多様なアプローチの仕方考えるようになった。
- ◇参加型にしたら、生徒たちの考え方や人との関わり方が今までとは違う角度で見えることがわかった。
- ◇自分の生活や考え方が、いろんな人に影響していることに気づいた。参加型で実践した授業の生徒への影響は大きく、自分の責任としてこれからも教育に携わっていきたいと思えた。
- ◇学校の中で国際理解に関するテーマを扱える機会は案外多いこと、参加型の手法を様々な場面で取り入れられることを学んだ。

<自分の変化、児童生徒などの変化を通した参加型の効果の実感>

- ◇参加型が楽しい!という実感と、楽しければ学びも楽しい!という体感を得られた。
- ◇参加型は楽しいし面白いし、講義型の授業よりもより主体的に学ぶことができる。
- ◇参加型を取り入れるようになったら、互いの考えを尊重することの大切さに気づく子どもが増えた。
- ◇教科書を前提とした学びから脱却したら、身近なことについて知ること疑問をもつこと大切さと面白さが、生徒にも自分にも芽生えた。
- ◇参加型を取り入れることで、児童の考えも話し合いにより深まり、よりよい発想が生まれた。全体で発表することにも慣れた。
- ◇参加型の学びは、①体を動かす(作業やワーク)→②頭を動かす(自分の意見をアウトプットする。限られた時間の中で)→③心を動かす(人の意見やグループの成果物への感銘や満足感)→①' また体を動かす(新たな行動やワーク)→②' また頭を動かす→③' また心を動かす→①'' またまた…→②'' またまた…→③'' またまた…の好循環だと感じた。3つ(体と頭と心)をバランスよく動かせるプログラムがよいプログラムだと思った。自分を信じる+学生(対象)を信じる+参加型の力を信じる→気づき+行動+笑顔が生まれる。

<他者、社会、世界への関心の高まり、視野の広がり、視点の変化>

- ◇支援、援助、協力という言葉には違いがあること、金銭や技術の支援だけでは不十分だとわかった。
- ◇途上国は可哀想だから支援するという視点から、同じ地球市民として共通の課題であるから、共に考え、支援をしていかなければならないといったような考え方の変化があった。
- ◇1人の力は限られているが、協力者を増やし、草の根レベルでの活動が大切なのだとわかった。
- ◇遠くのことに思いを馳せるばかりでなく、身近な人やことを大切にしていこうと思えるようになった。
- ◇国際協力に関わる仕事は、外国に行かなくても日本でもできるし、それもとても重要だと気付いた。
- ◇自分とは違う文化を持った人、自分とはまったく違うと感じられる人に対して(国籍問わず)寛容な気持ちを持ち、受け入れようとする心を育てることが、国際理解なのだと思う。

<自分自身の行動の変化、スキルの向上>

- ◇遠い存在に思えた開発、国際協力が、身近なことだと感じる事ができた。その中で、自分ができることを具体的に考えたり、自分だけではなくほかの人に伝えたりすることができるようになった。
- ◇日々関心を持ちニュースをチェックするようになった。
- ◇今持っているものに満足せず、意識してアンテナを張り多様な情報をキャッチできるようになった。
- ◇今回、特にファシリテーターに注目したことで、人前での話し方のコツを学ぶことができた。
- ◇自分自身が気づく、考える、行動するプロセスをとれるようになったこと。
- ◇プログラム作りが自分でもできる、やってみようと思えた。進め方にバリエーションができた。

<仲間との出会いと協働、仲間からの刺激を通じた自身の変化>

- ◇フォーラムのファシリテーターをして、みんなで作り上げていく楽しさとプログラム作りの難しさを感じた。他のファシリテーターから学ぶことが多くあり、何より参加者の持つ力を実感できた。
- ◇同じ考えを持つ同士の存在があったからこそ、一人では折れたり、手を抜いたかもしれない授業のプログラム作りを粘って取り組むことができた。
- ◇一人より他の人と一緒に何かを考えたり行ったりする方が良いし楽しい、と考えるようになった。自分では思いつかないことを他人は思いついたり、自分の興味がないことに興味を持っていたり、それが意外と面白かったりする。
- ◇自分が何でもできる人にならなくても、仲間がいてその中で自分の役割を果たせばいいと気づいた。

● 研修で得られた気づきや学びの今後に活かし方

研修で得られた気づきや学びを今後どのように生かしていくかの意見は以下のとおりである【設問 26】。

設問 26；具体的にどのように活かしていきたいと考えていますか。(主な意見)

<教科教育・総合学習・学級経営・特別活動へ参加型やハンズオンの導入>

- ◇授業に参加型の手法を意識して取り入れていきたい。
- ◇クラス運営でも参加型手法を生かしていきたい。開発教育について生徒が学ぶ機会を増やしたい。
- ◇世界地図や子どもの手の届くところに様々な世界のものを置き、子どもの視野を広げていきたい。
- ◇今後も参加型の手法を多くの場面で取り入れて、学級経営に生かしていきたい。
- ◇学級経営ではもちろんのこと、英語の授業、E S D活動に参加型をうまく取り入れていきたい。
- ◇国際理解教育の教科以外でも、導入を検討したいです。
- ◇普通の授業や学級運営などにも参加型の手法をいろいろ取り入れていきたいと思います。生徒が自分たちで考えて、動けるようになることを目指して、いろいろ試していきたい。
- ◇人権教育の場面でも手法を取り入れて授業実践したい。

<学びと実践の継続とブラッシュアップ>

- ◇さらに情報を得て、開発教育・国際理解教育のプログラムを再構築する。
- ◇どんな情報が児童の「気づき」に有効なのか、児童の実態に合わせて研修し続けていきたい。
- ◇他の人の実践を見に行くことができればいい。アドバイスしあうことで互いに学び合える。
- ◇学んだがまだ習得はしたとは言えないので、今後もすこしずつ実践していきたい。

- ◇自分自身が実践するとともに、これからも色々な研修に積極的に参加したい。
- ◇今後も、国際理解教育を続けるとともに、参加型を様々な場面で効率的に使えるようにしたい。
- ◇今後も、毎年担当する子どもたちに合わせた指導計画を立てて、授業を実践する。

<開発教育・国際理解教育で学んだ視点の還元>

- ◇自分と違う観点から見ることの大切さを授業で伝える。
- ◇自分たちと世界のつながりを感じられる教材を取り入れ、世界についての関心が高まるよう工夫する。
- ◇生活の身近なところからテーマを設定し、低学年でも何かしらを感じることができるようにする。
- ◇自分に与えられたことに精いっぱい取り組むことで、少しずつ良い変化を創り出せるようにしていく。
- ◇エルサルバドルとのつながりを継続し、みんなで考え課題を越える姿勢をすべての場面で大切にする。
- ◇自分、学生（対象）、参加型の力を信じるころから始めようと思う。

<仲間を増やし、学年全体の取り組みとなるような働きかけ>

- ◇同僚たちに参加型の手法や国際理解教育について頒布し、同じ先を見ることのできる仲間を増やす。
- ◇また自ら授業公開を行い、より多くの教員に開発教育の在り方を伝えたい。
- ◇学校が変わっても、国際理解について多少は知識があるのだという立場で仕事をしたい。
- ◇さらに新しい教材開発を進め、すべての学年で実践すること。
- ◇職員研修において実践し、これまで関心を持っていなかった教員にも啓発したい。
- ◇1年を通しての体系的な取り組みをしていきたい。

<教材開発>

- ◇実際に研修会で使える参加型プログラムを独自で開発する。
- ◇世界の諸問題を扱う単元において、さらに授業開発に取り組む。
- ◇エルサルバドルで学んだことを今後もあらゆる手法や指導案で伝えていきたい。
- ◇いつも同じ指導案ではなく、経済・政治・環境等の分野に分けてもっと力を入れて教材を作りたい。

<これからの自分の生き方への反映>

- ◇シニアボランティアに参加を希望する。 ◇授業やこれからの人生に生かしていきたい。
- ◇一人の人間としては、もっと積極的に人とつきあうようにしたい。
- ◇自分の人生において、地域と世界を意識して生活していこうと思う。
- ◇イエナプラン教育を広めていく活動に生かしていきたい。

■ 研修・実践報告フォーラムをより良くするための提案

● 開発教育指導者研修(実践編)をより良くするための提案

主なものは以下のとおり。

<第3回研修の内容>

- ◇「実際にグループに分かれてアクティビティのファシリテートを試してみる」という時間がとても実践的であったので、複数のアクティビティが実践できるとよい。

<第3回と第4回研修の間の期間>

- ◇9月～2月までの間に、実践の中間報告をしあうような会があるとありがたい。
- ◇有志でフォーラムのワークショップづくりはとてもよかったので、全員が体験できるとよりよい。

<第4回研修の内容>

- ◇受講者全員の実践を共有する方法があるとよい。
- ◇フォーラム本番に向けた準備のため、研修時間内に準備時間をより多く充ててほしい。
- ◇フォーラム準備のために、研修終了時間を早めてほしい。

<研修の事務的なこと>

- ◇個別の教材に記載している出典を一覧にして配付してほしい。
- ◇指導要領に沿った各教科との関連がわかると現場でより使える（水分野4年社会、食料自給率5年社会）
- ◇実践編のみ受講者に、海外研修受講者の写真や手に入れた教材を利用できるような機会があるといい。

<来年度の研修>

- ◇今年度に重複しない新たなアクティビティを知ったり、新しい参加型手法を学んだりしたい。
- ◇土曜日と日曜日の連日研修よりも、毎週日曜日の方が参加しやすい。

<研修の広報>

- ◇愛知県以外の受講者が多くなるような広報をしてほしい。
- ◇学校に届く告知の部数をもう少し増やすと、多くの先生に伝わる。

● 実践報告フォーラムをより良くするための提案

主なものは以下のとおり。

<ポスターセッション>

- ◇発表回数…見る側から「もう少し増やしてほしい」、発表する側から「負担が大きいのので減らしてほしい」
具体的に「4回がよい」、「5回はよかった」。
- ◇実践の理解…「流し見タイムの時間をもう少し増やすとよい」、「実践報告シート集に、発表の見どころ等の実践者のコメント、使った教材や成果物のデータがあると、聞けなかった実践も把握できる」、「こういう方に聞いてもらいたい等を一言まとめたものを別途配付するとよい」、「前年度の発表の様子をビデオで見られるとプレゼンの方法が学べる」。
- ◇フィードバック…「参加者に、よかったところ・もっとここが知りたかったところを付せんに書いてもらえるとよい」、「発表直後に振り返りの時間を取り、参加者の感想等の詳しく知りたい」
- ◇発表準備…「前日にポスターの準備ができると当日バタバタしない」、「当日の準備時間が短い」
- ◇発表環境…「部屋数を増やしてもう少し静かに発表を聞きたい」、「参加者に椅子があるとよい」
- ◇アナウンス…「第3回・メーリングリスト・郵送などで伝えていただいたが、それでも発表のイメージが持てていない受講者がいたので、発表イメージの伝え方をより工夫する」、「当日のポスター片付け時間について口頭で説明してほしい⇒後からじっくり見るつもりだったが昼休みに片付けた」

<実践体験ワークショップ>

- ◇有志によるプログラムづくりの準備…「第4回研修を早めに終了して打合せの時間を取って欲しい」、「Eメールだけでなく、会ってアドバイスをもらう機会を担保してほしい」、「事前にワークショップの詳細・進め方についてよりていねいに説明してほしい」
- ◇ワークショップへの参加…「1つだけでなく複数参加したい」